

ロシアと日本の相互理解をはぐくむ方法はいろいろあることでしょう。ふたつの国の人々がともに苦境にあった頃の歴史的な事実をふりかえってみることもそのひとつです。

今日は、90年前に私の家族に起こったできごとについてお話します。

はじめに、当時のロシアの状況を簡単にご説明します。

1918年、ペトログラード（現在のサンペテルスブルグ）は、第一次世界大戦と1917年のロシア革命により、大変困難な時代をむかえていました。

飢饉、疫病、経済の悪化そして生活の無秩序に人々は苦しんでいました。そこでロシアの赤十字や地方の教育機関は、こどもたちのために、より安全で経済が安定している場所でのサマーキャンプを企画しました。

1918年5月末に、500人のこどものグループが二つ編成され、ウラル山脈地方の山に行き、教師の監督のもと、3か月を過ごすことになりました。

そのキャンプの名前は、「こどもに栄養を与えるサマーコロニー」だったので、こどもたちは自分たちを「コロニスト」と呼びました。その中に私の祖父母もいたのです。このお話の中でも、「コロニスト」という名前が出てきます。

コロニーでの生活は、はじめは悪くありませんでした。ペトログラードよりもずっと良い食料がありました。こどもたちは、スポーツ、ダンス、歌などを楽しみ、さまざまな行事で競いあいました。もちろんこどもたちの態度は常によかったわけではなく、時には先生がおこることもありました。しかしおおむね良い休暇でありました。

しかし不運なことに、当時、残酷な内戦が始まっていました。コロニストたちは、戦闘地域にいたために、予定されていた9月までに帰宅することはできなくなりました。

こどもたちは、お金、食料、薬、あたたかい服、寝る場所などの日常生活に困ってしまいました。教師も苦境にたち、責任ある立場であっても、こどもたちのために何もできませんでした。戦いは、こどもたちのいる部屋の窓のすぐ近くでおこなわれ、時には、部屋に銃弾が飛んできてとても危険でした。

幸いなことに、シベリアで働いていたアメリカの赤十字の人々がこの悲惨な状況を察知しました。こどもたちは、3両の大きな軍事列車に乗り、ウラジオストクまでたどりつきました。こどもたちは、赤十字に保護され、故郷のペテログラードから一万キロ離れた、むしろ日本のほうが近いウラジオストクに住むことになりました。

こどもたちは、一年間ウラジオストクに住みました。学校に行き楽しく過ごしました。ただしアメリカの赤十字の会長であるアレン氏に、いつ僕たちは家に帰ることができるの？と毎日聞きました。慈悲深いアレン氏は、もうすぐ帰ることになるよと約束してくれました。

1920年の春、日本軍がウラジオストクに侵入し、アメリカの赤十字はロシアの領土を立ち去らなくてはならなくなりました。こどもたちは、誰にも世話をしてもらえずに残されるはずでした。しかしアレン氏は1000人の3歳から18歳までのこどもたちを裏切ることはできませんでした。残していけば、こどもたちは、生き残ることはできないでしょう。

当時の政治的状況では、こどもたちを救う唯一の方法は、海を越えてヨーロッパへ連れていくことでした。そこで大きな船が必要となりました。しかし船がありません。だれ一人助けの手を

さしのべてくれません。何百万人もが危機的状況にあるのに、よその千人の子どもたちのことを考える余裕はなかったのです。当時、アメリカもロシアも日本とは友好関係にありませんでした。1905年の日露戦争の記憶はまだ強く残っていたのです。

しかし結果的に子どもたちに目を向けてくれた唯一の国は、日本でした。神戸の「勝田汽船」という会社から日本の船が赤十字に雇われました。日本のかたがたがこの冒険を引き受けてくれたのです。さて「陽明丸」と呼ばれる船ですが、乗客用ではなく、装備のない貨物船でした。船室も乗客のための設備も、何もありませんでした。

しかしアレン氏は、くじけることなく、日本にエンジニアを即座に送り、船はまもなく子どもたちを故郷に連れて帰るのにふさわしいものに改造されました。寝室や食堂、台所、シャワー、トイレ、洗濯室、勉強や娯楽のための部屋も造られました。デッキの遊び場、病人のための区画、換気設備など、多くの必要なものが整えられたのです。

日本のエンジニアや職人がこれらの緊急な改造工事に参加しました。

ウラジオストクのコロニストたちは、船を待っていました。この船で、二つの大洋を超えて、ヨーロッパまでおもしろい旅をすると言われたのです。その時はどんな冒険になるかは予想もしていませんでした。

ついにおとぎ話のように船が現れました。美しい船は、ロマンチックな外国の名前を持ち、しあわせを約束してくれる船に思えました。

当時17、18歳だった祖父とその仲間は、ボートに乗り、この船が港に入ってくるのを迎えに行ったそうです。彼らは船を実際に手でさわり、涙を浮かべました。少女も年若い子どもも皆が目に涙を浮かべて船を迎えました。

1920年の7月13日、陽明丸は、ウラジオストクから出港しました。コロニストたちは、おかしな歌をすぐに作りました。「船は日本製、旗はアメリカ製、乗ってるぼくらはロシア人」と。

マストには、日本の旗とともにアメリカと赤十字の旗がありました。煙突には、大きく目立つ赤十字のマークがつけられていました。戦闘用ではなく、人道的な組織の船だと知らせる必要があったのです。

冒険は始まりました。

おとなも子どもも、時には船酔いになりながらも、新しい生活に数日で慣れていきました。そして、陽明丸は日本に到着しました。

その頃には、子どもたちはかやはら船長と年若い乗組員たちになじみ始めました。しかし日本語がわからず、日本人のほうも英語が少しわかるだけで、お互いに微笑むしかありませんでした。

陽明丸は、北海道の室蘭に立ち寄り、修理と荷積みをする必要がありました。

子どももおとなもビザなどの書類はなかったにもかかわらず、町に出かけて一日過ごす許可が出ました。

完璧なもてなしでした。地元の学校に案内され、生徒たちに暖かく歓迎され、少し前の日本とロシアの戦争や、当時の政治に関わる偏見はまったくありません。演奏や歌を披露しあい、コロニストは、夕方、しあわせな気分で船に戻りました。あふれるばかりのみやげの品物も受け取りました。

長く退屈な船旅が始まりました。本でしか知らないアメリカ大陸をめざす旅です。

船上のこどもたちは、船長の想像を超えた乗客でした。あらゆることに興味を抱き、時には安全について忘れてしまいます。そこで大人たちは、彼らに安全装具を着用させ、救助ボートに最短の時間で乗る訓練をさせました。

ところで救助ボートには、こどもたちを夢中にさせるものがありました。緊急用の食糧としてチョコレートを入れた大きな重い缶が積まれていたのです。

まもなくいくつかの缶がボートからなくなりました。船長はコロニストの責任者、アレン氏に、この事件を調べさせ、犯人を見つけさせました。

ベッドの下から半分食べてなくなったチョコレートの缶が見つかりました。こどもたちはちょっと味見しただけで、残りは両親のところにお土産として持って帰ると言いわけしました。アレン氏はかわいそうに思いながらも、訓練のときだけボートに近づくよう命じました。

船長がこどもたちを叱ったのはこの時だけではありません。

アメリカ人からもらった楽器で、音楽が得意なこどもたちの有志がオーケストラを編成しました。土曜日の夕方は、船上でダンスすることが許可されましたが、かやはら船長は音楽がうるさくて眠れず、不快に感じていました。やがてこどもたちと乗組員の対立が生まれ、けんかが起こりました。このけんかではロシアの少年が勝ちました。相手の日本人は負けたことに怒り、刃物を取り出しました。そこでロシア人のほうもナイフで対抗しようとした。運よくロシア人の教師が気がつき、船長の助けもあって、この対決はどうにか止めることができました。

これは、いくつかあったいざこざの一例にすぎません。

夜、ベッドのそばを通る時に、乗組員が手をさわっていくと、思春期の少女たちが訴えたこともありました。こわがって少女たちは金切り声をあげました。その晩、眠れなくなる少女もいました。船長は乗組員をさとし、少女たちをこわがらせるようないたずらはしないように命じました。

このようにコロニストも乗組員も若くて、すぐ調子に乗ってしまうのです。言葉の障壁も問題でありました。

ともあれ船は太平洋を進んで行きました。生きたサメやイルカが泳ぐのを見るのは楽しみでした。海で泳ぐ機会もありました。大きなネットを海に沈め、勇気ある少年たちは飛び込みをするのです。海の真ん中で泳ぐのはかくべつでした。この日のことは一生の思い出です。

とうとう対立やけんかを忘れる日がやってきました。アメリカ合衆国に近づいていたのです。

カリフォルニアの都市、サンフランシスコでは、熱烈な歓迎を受けました。ここでの一週間の滞在は忘れることができないものでした。ロシア系のアメリカ住民は、コロニストを手厚く迎え、中には養子にするからアメリカに住まないかと申し出る人もいました。しかし受け入れるわけはありません。誰もが故郷にいつときでも早く帰りたかったのです。

こどもたちが上陸して楽しく過ごしているあいだ、船ではさらに続く旅の準備をしていました。清掃や修理、蒸気船の燃料である石炭の補給がなされました。

すぐに陽明丸はサンフランシスコを出発し、パナマ運河に沿って大西洋に出ました。

次にコロニストが訪れたのは、ニューヨークです。

さらに一週間、観光やコンサート、人との出会いが続き、もてなしを受け、みやげの品やプレゼントをこどもたちはもらいました。これらの品物はいまでも大切にされています。

どんなに楽しく、新しい経験ができて、子どもたちはみな、できるだけ早く故郷のペテログラードに帰りたいと思っていました。そこで家族が待っているのです。

親たちは大変心配していました。長い間、戦闘のおかげで通常の郵便配達が可能となり、子どもたちの情報がなかったのです。多くの親は、子どもたちに恐ろしいできごとが起こっているような想像をしていました。

**But all is well that ends well.**

しかしながら終わりよければ、すべてよしです。

アメリカの赤十字と、陽明丸に乗った日本の船員の努力で、船はバルチック海のヨーロッパの海岸にある日到着しました。

地図を見ると、ペテルスブルグのあるロシアの西側に一番近い国はフィンランドであることがわかります。1918年以前には、ロシア帝国の一部でもあった国です。しかし1920年に独立し、ソビエト連邦とは外交関係がありませんでした。そのため子どもたちは、家に帰るまで二カ月以上もフィンランドで過ごさなくてははいけませんでした。

1920年の9月のある日、子どもたちが陽明丸を去る日がやってきました。時にはけんかをした日本の若い乗組員に別れを言い、今では、あまり怖くなくて、むしろ優しく思えるかやはら船長にもさよならを言うのです。

乗組員全員が、デッキに一列に並ぶよう言われました。子どもたちもその前に並びました。みんな涙を浮かべていました。かやはら船長は、最後のスピーチで、珍しい乗客であり、時にやんちゃだった彼らに、はなむけの言葉を送り、君たちのことは決して忘れないよと言いました。

陽明丸は乗客が全員降りたときに、長い汽笛を鳴らしました。別れの時であったのです。

二ヶ月後、コロニストの最後のグループがフィンランドとロシアの国境を超えました。

この二年半の放浪のあいだ、子どもたちは、地球を一周することとなり、三万六千キロも旅をしたのでした。

時は過ぎ、この大冒険の旅に参加した多くの人は交友を続け、結婚した人もいました。私の祖母もそうです。彼らは故郷に帰ってから数年後に結婚し、私の母が生まれました。

私はこの旅のことを、おとぎ話として祖母から聞きました。そして幼い頃から、神秘的で美しい「陽明丸」という名前を覚えていました。

ずいぶんあとで、私はかやはら船長の名前を知り、彼の写真を見ました。十年ほど前からは、この話について真剣に深く調べ始めました。

今日の話には、二つの目的があります。ひとつは、政治的なちがひ、国境などの境界線は、善と悪をへだてる「境界」ほど重要なものではないと伝えることです。

宗教や国、政治の違いが何だというのでしょうか。善意をもつ人々は、苦境にあっても互いに理解し、助け合うことができるのです。

ふたつめにお伝えしたいのは、自分たちは歴史とは切り離せない存在だと感じてほしいということです。どの家族にも世代を超えて語りつがれるようなちょっとした物語があります。そしてどの話も自分の町、国、そして世界の歴史になんらかのつながりを持っています。

親に、そしておじいさん、おばあさんに、今までの人生で、何か本当に重要なことがなかったか、覚えていない？と、聞いてみてください。このような話は、歴史的なできごとに関係していることでしょう。

祖先のことを思い出し、自分で調べてみてください。そうすると、世界の全体像に貢献することになります。自分の家族を愛する気持ちを通じて、自分の国を愛するようになるでしょう。

今日、南山男子部の祝典に参加し、みなさんの前でお話できることは光栄です。私の訪問にご協力いただいたすべてのかたに心よりお礼をお伝えしたいと存じます。

プロジェクトに関わってくださった順番に、次のみなさまに感謝の意を表します。

**ペテルスブルグの子供図書館館長 ミラ ヴァシュコヴァさま**  
**ペテルスブルグの日本語教師で勲章受章者 ヴァレンティナ カリニーナさま**  
**大阪の外国語学校教師 田中やすこさま**  
**日本のアーティスト 北室 南苑さま**  
**『人道の船 陽明丸顕彰会』事務局長 石塚 保次さま**  
**在ペテルスブルグ日本総領事 川畑 いちろうさま**  
**産経新聞の若いジャーナリスト 佐藤 たかおさま**  
**南山男子部の教師 熊川 重也さま**  
**南山男子部の芳村慶祐君、田中開也君、佐々将之君**

そして私の祖国と家族をあなたがたの美しい国、心のあたたかい人々と結び付ける、今日の話、熱心に聞いてくださったみなさま、本当にありがとうございました。